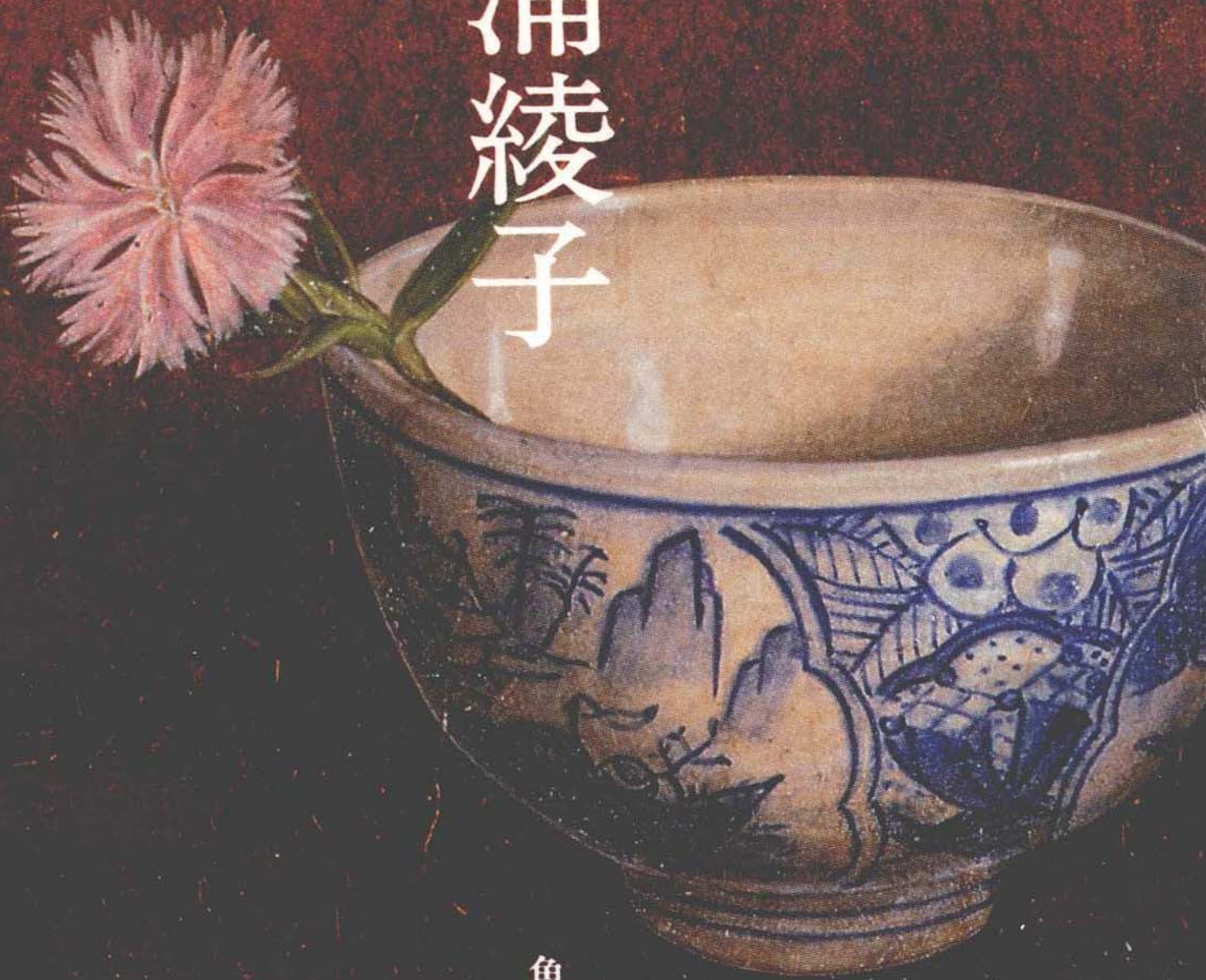


母

三浦綾子



角川文庫

はは  
母

みうらあやこ  
三浦綾子



角川文庫 10038

平成八年六月二十五日 初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

編集部(〇三)三三三八—八四五一

電話 営業部(〇三)三三三八—八五二一

〒一〇二 振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

母

三浦綾子



角川文庫 10038



# 目次

第一章	ふるさと	五
第二章	小樽の空	四〇
第三章	巣立ち	六二
第四章	出会い	九二
第五章	尾行	一三六
第六章	多喜二の死	一七四
第七章	山路越えて	一九九
あとがき		二三五
小林セキ年譜		二三〇
参考文献並に資料		二二三
解説		二三五
久保田暁一		二三五



## 第一章 ふるさと

四月にしては珍しい、あったかい日ですね、今日は。北海道の四月ったら、もっと寒いもんですけどね。増毛ましけのほうの山も、はつきり見えて、海もきれいで、いい日だね。

それはそうと、本当にありがたいもんだねえ。わだしはね、再来年は数えで九十になるんですよ。こつたら年寄りが、こうしてみんなに、大事に大事にしてもらつてねえ。もつたいたない話です。これもみんな、多喜二があつたら死に方ばしたからかも知れないねえ。そうか、この年になるまでの思い出ば聞いて下さるか。何せ、ずいぶんと長い間のことだから、忘れたことやら、うろ覚えのことやら、いろいろあるけど、それでいいのかね、あんたさん。

んだ、わだしはね、秋田の大館おおだての在あに生まれてね、そう釈迦しゃか内村ないっていう田舎でね。山がすぐ目の前まで迫ってくる、小さな小さな部落だった。夜、ふくろうがよく鳴いてね、その声が妙まぎに淋さびしくてねえ。

人間って、あんなふうに鳥の声だの、木枯しの音だの聞いて、淋しいっていうことを、覚えるもんなんかね。わだし、ぼろ布団の中で、背中丸めて、ふくろろの声に聞き入っていたもんだ。

んだなあ、四つ五つの頃だった。今でもあの布団の中のあの姿は、どういうわけだか、はつきりと目に浮かんでくるんですよ。

そうそう、目に浮かぶって言えば、わだしの生まれた家の真向かいにね、巡査の駐在所があったっけ。それがあんたさん、今から何年か前、釈迦内村に行ってみた時、まだおんなじ場所に、駐在所があつてね、懐かしいのなんのって、ぶったまげてしまったの。

昔、駐在所には、今考えれば五十に近い巡査がいてね、立派なひげを立てていたっけ。でも、いつもにこらにこらしていて、みんなに、「駐在さん、駐在さん」って親しまれていたもんだ。その駐在さんが、どういうわけだか、わだしのこと、時々めんこがってくれて、「おセキ、おセキ」ってね、ほんとにどうしたわけだったもんかね。

わだしが玄関の戸ばがたびし開けて外に出ると、駐在さんがうしろに手を組んで、駐在所の戸口に立っているの。そしてわだしを見ると、

「来い来い、おセキ」

って、手招ぎしてね、わだしが喜んで走って行くとね、頭なでてくれたり、あめだま飴玉一つ口



ん中さ入れてくれたりしたもんでした。それが何ともうれしくってねえ。今でも忘れられないんですよ、あの飴玉の味がね。

何せ、わだしらの家ときたら、貧乏でなあ。少しばかりの田んぼの小作ばして、細々と生きていたからねえ、飴玉だの、煎餅だの、親からもらうなんてこと、滅多になかった。とにかく小作だけでは食って行かれんから、おつかさんが自分で打った手打ちそばを、街道を行く人に売っていたの。夕方になると玄関の戸は開けて、お客さんがぼつらぼつらやって来てね、あれでも、一日十五、六杯は売れたべか。何せ明治の十年代のこと、そば一杯一銭という頃だったから、どれだけ生活の足しになったもんだかねえ。

ああ、当時、米一升七銭ぐらいだったべか。それはともかく、力一杯そば粉練って、ちよんちよんちよんと細く切って、大鍋で茹でて、タレを作って、それで一杯が一銭。それでも売ればありがたかったのね。

はあ、わだしは三つ四つの頃から、体を動かすことが好きでねえ、家の前を大きな箒草を束ねたもので、せっせと掃いたり、お客さんに、

「いらっしやい」

と、大きな声をかけたり、近所の庄屋さんちの赤ん坊を背中におぶって、子守りをしたりしたもんです。

何せねえ、三つ四つのちんこい子供が、赤ん坊をおんぶするわけだから、下手をすると帯がゆるんで、赤ん坊を引きずりそうになる。そんなわだしに子供をおんぶしなおしてくれたのも、あのひげの駐在さんだった。

だから、わだしはね、おまわりさんというもんは、そりゃあ優しいもんだと、こんまい時から信じこんでいた。ほんとに、日本中どこもここも、優しい親切な駐在さんで一杯なんだと、かなりの年まで思っていました。

それはともかく、わだしは貧乏で、学校に行きたくても行かれなかった。わだしの村は、「釈迦内」なんて、ありがたいお釈迦さんの名前のついている村だともね、右ば見ても左ば見ても、みんな似たような貧しい家ばかりだった。屋根に<sup>まき</sup>葺<sup>か</sup>いて、その<sup>まき</sup>葺<sup>か</sup>を飛ばんように、でっかい石でおさえた家が、街道筋に、ひと握りほど建っていたような村だった。学校さ行かれない子守りたちは、三人五人とつれ立って、学校の窓の下さ行って、こっそりと先生のお話は聞いたり、唱歌に耳は傾けたりしてね。意地悪く赤ん坊が泣き出すと先生によっては、窓から顔ば出して、手を大きく振って、追い立てたもんでした。まるで、野良犬ば追うみたいに、

「あっちさ行けっ、あっちさ行けっ」

てね。それでも、赤ん坊が眠るとね、また足しのばせて、こっそり窓の下に立ってね、

こんまい体をゆすりゆすり、赤ん坊のお守りをしながら、浦島太郎の話だの、桃太郎の話だの聞いたりしたもんだった。

八つ九つになるとねえ、おっかさんが、野良で忙しくしていても、わだし一人で、七輪さ火ば熾おこして、ねぎ刻んで、あつたかいかけそばを、お客さんに出したもんです。わだしはね、さつきも言ったとおり、生まれつき働くのが好きで、おまけに人が好きでね、そば屋の仕事は何にも苦にならんかった。ま、三、四人も入れれば、すぐに一杯になる店とも言えない店だった。こんまいわだしが、かけそばの井どんぶりはお盆に乗せて、そろりそろりと運んで行くと、

「ほれ、駄賃だ」

と、五厘ごりんくれる客もいた。それがうれしくってねえ。野良から帰るおっかさんに、その駄賃を上げるのが楽しくてねえ。

楽しいと言え、お客たちがいろんな歌や、話を聞かせてくれるのも、楽しかったねえ。そんな聞いた歌にこんな歌があった。この歌は、どの客もよくうたったので、いつの間にか、わだしも覚えてしまった。ちよつとうたってみようかねえ。

人がなんぼ貸せといつても貸さないで

蔵の中の米ば腐らせて

空見て泣きべちよかきながら

川さ捨てる

ええ気味だ 角地の旦那だんな！

妙な歌だと思ふべね。秋田弁丸出しの、おかしな歌だと思ふべね。けど、どういふわけか、わだし、今になつてもこの歌が、ひとりでに口から出ていることがあるの。ふと気がつくとうたっているんですよ。秋田の先祖代々からの歌かねえ。

え？ いい歌だ？ どうしてだべ。こんな、人ば恨むような歌、いいことないべと思ふけど、釈迦内の子供たちは、みんなこの歌ば子守り歌にして、おがったのかも知れないね。これが貧しい百姓たちの、正直な気持ちだったんだべなあ。

わだしが木村の家から、小林の家に嫁に来たのは、明治十九年の暮れのことでした。その冬一番の寒い日で、馬櫓ばそりがりりんりん鈴を鳴らして走る。雪が顔に刺さる。赤い角巻かくまきば手にしっかり持つてても、手も冷やっこい、足も冷やっこい。

小林の家まで、二里もあつたかねえ。まだ十四の、今で言えば十三の、西も東もわから

んような子供が、嫁に来たわけですねえ。第一、嫁こになるということが、どんなことか、さっぱりわからなかった。

それでも、どこの嫁さんも、きりきり舞いして働いていることだけは、知っていた。とにかくその日は寒くて、うれしいより悲しいより先に、足の冷たさが我慢できなかった。十三の嫁こを乗せた馬籠がね、右に左に揺れてね、誰か男の手に、背中ばしっかり支えられていたもんでした。

なんで昔は、あんな頑<sup>がんぜ</sup>はない子供ば、嫁に出したもんだかねえ。やっぱり貧乏で、口減らしのためだったべか。わだしより貧しい小娘が、街さ身売りさせられていた頃だからねえ。

婿さんはね、二十一で末松つあんと言った。背の高い、優しい人だった。わだしは馬籠から降りるや否や、

「寒い寒い」

と小林の家に駆けこんで、囲<sup>いろり</sup>炉裏のそばに、冷たくてしびれそうな両足を、火にあぶつたら、婿さんがそれはそれは優しい顔をして、じーっと見ていなさった。

嫁入りといってもね、高<sup>たか</sup>島田結<sup>むす</sup>うわけじゃなし、角<sup>つの</sup>隠<sup>かく</sup>りするわけじゃなし、桃割れに、花模様の銘<sup>めい</sup>仙<sup>せん</sup>の着物着せられてね。そうだ！ 赤い牡丹<sup>ぼたん</sup>の柄の帯をしめさせられていたっ

け。紫の銘仙の羽織着て、荷物は行李こくり一つに布団だけ……。その行李もなあ、ぎっしり着物が詰まっていたわけじゃなかった。がふらがふらしていたから、普段着の二枚もあったかどうか。それにモンペ、野良着、手甲てっこうなどが入っていたのね。

それでも、足があったまるところで、三三九度の盃さかずきをした。何しろ生まれて初めてお酒は口に入れたわけだからね、むせてしまって、誰かが背中撫なでてくれた。

んだなあ、どんなごちそう出たっけかね。親戚しんせきや近所きんじよの人が十五、六人も来ていたべか。嫁入りの夜のことは、さっぱり覚えていないの。ただ、家に入るなり、いきなり囲炉裏いろりで足をあぶったことだけは、はっきり覚えていてね、あとで思い出すたびに恥はずかしかつたもんです。

でもねえ、小林の人は、誰一人そんな話はしたことがないの。わだしが嫁に来た小林の家には、婿さんの末松つあん、末松つあんのお父ちちつあんの多吉郎、その後妻のおツネさんがいたけどね。これがまたみんな優しくかった。おツネさんは末松つあんからみると、ママおっかさんだともね、ほんとに優しいひとでね、わだしが朝起きると、

「よく眠れたかや」

と聞いてくれたし、寒い日は、

「風邪かぜひくなや」

って、氣い使ってくれてね、顔もきれい、心もきれいな、わだしにはいいお姑さんしゅうとめだった。

こういう人だちだったから、嫁入りの夜、いきなりわだしが囲炉裏に足ばあぶった話など、だあれもしなかった。

ああ、見合だったかって？ さあね、何しろ田舎のことだし、明治も十年代の頃のことだしね、見合も何もあったもんじゃないわね。誰かが、

「どこそこに、ちようどいい娘っここがいるから、もらったらどうだ」とか、

「どこそこの息子は親孝行だから、嫁に行ったらどうだ」

のって、誰かが話を持ってくるわけ。誰も格別考えることもなく、嫁取りしていたようなもんね。

わだしの場合、ちっちゃなそば屋だったけど、わだしが店に出ていて、働きの評判だけは、二里ほど離れていた小林の家にも、聞こえていたらしい。

とにかく、百姓が嫁っこもらうのは、器量より、働きの者が第一の条件でね。体が丈夫で働きの者ならよかった。

しかしね、あんたさん、十三でも十四でも、十七でも十八でも、とにかく嫁に行けた者

は、なんぼ辛くても、まだ幸せだった。明治、大正、いや昭和の十年頃まで、東北の貧しい農家に生まれた娘たちは、一人前になるかならんうちに、女郎に叩き売られたもんだ。わだしの友だちも、一人や二人ではなかった。つまり、珍しいことじゃなかったのね。辛いも、いやだも、百姓の娘たちは言われなかったの。だって、家の中には、弟だの、妹だのがごしゃごしゃいてね、その誰もが腹ば空かしているの。

北海道の農家はとうだったか知らんけど、秋田では、四分六分の割合で、地主に米を納めんければならなかった。ろくに食べる米もなくて、辛い思いをしている兄弟たちや両親の姿ば見てたら、身売りするより仕方がないと、納得してしまふのね。

いや、第一、身売りって、どんなことか、誰もよく知らない。

「いい着物着てな、白い米の飯も腹一杯食わしてもらえる、親には金がどっさり入る」

と、周旋人に聞かされると、自分から進んで、身売りした娘も何人もいたっていう話だ。だども、うちの隣のヒサちゃん、駐在の裏のトミちゃんも、売られてから五、六年経つて、体悪くして死んだと聞いた。だから、わだしには、今でもね、身売りしたひとの話聞くと、可哀相で可哀相でなくなるよ。

あれまあ、何だって身売りの話になってしまったんだべか。なんだ、わだしが小林のうちに嫁に来た話をしてたんだっけね。



何せ、わだし十三だったからね。ママおっかさんの、つまりお姑しゅうとめさんば、

「おっかさん、おっかさん」

って、無邪気になついたもんだった。

わだしはねえ、裁縫所に通ったことなんか、なかったの。何しろね、習いに持って行く反物が無いの。だから、何も着物縫うことの知らない嫁さんだった。布団に綿入れることも知らん嫁さんだった。それを教えてくれたのが、このお姑さんだった。

このお姑さんは、わだしが数えて三十二歳の時、七十八で亡くなられた。その思い出す顔は、どれもこれも、目もと口もとが笑っていて、本当に優しいお姑さんだった。

そうそう、

「小林多喜二の家は、貧乏百姓だった」

と、あちこちに書かれているそうだともね、貧乏になったのは、わだしが嫁に行く二、三年前のことだったらしいのね。小林の家は、下川沿村の川口ってところね、秋田から青森に行く羽州街道沿いにあったの。んだなあ、農家の五、六十軒もあったべか。まあまああの部落だった。

村の真ん中ば、きれいな米代川よねしろが流れていてなあ、街道を行く人やら、馬やら、牛やら、結構賑やかだったもんだ。